

# 17世紀の音声学者の半母音 [j] と [w] の記述

Seventeenth-Century Phoneticians' Description of the Semi-vowels [j] and [w]

熊田和典

KUMADA, Kazunori

## 1. 序 論

17世紀の英国では合理主義の影響の下、E. J. Dobsonがphoneticians（音声学者）と呼ぶほど言語音の分析が優れた文法家が現われた（199）。彼らの言語音に対する概念は今日の音声学の基準からすると未熟ではあったものの、今日の音声学の先駆者として役割は大きいと考えられる。前世紀の文法家、綴り字改革者は当時の乱れた英語の綴り字を嘆き、綴り字改革を実現するための前段階として当時の言語音を分析したが、彼らの分析はプリスキアヌス（Priscianus Caesariensis）やドナトゥス（Aelius Donatus）などのギリシア・ラテン文法家の伝統的な記述を踏襲するにとどまったものが多かった。17世紀の文法家、綴り字改革者の中には言語音の理論的な考察と体系化に関心を抱き、個々の言語の観察よりも普遍的な音標文字の考案に目を向けたものが登場した。彼らはギリシア・ラテン文法家の伝統的な枠組みから脱すことを目指し、彼ら独自の言語音に対する考えを基に新たな音声的枠組みを構築しようと試みた（Robins 135）。彼らの言語音の科学的考察により言語音の分類ならびに調音に関する分析は精緻になり、概して現在の音声学的な分析

に近くなったと言える。その彼らの言語音の分析の中で、現在一般に半母音（semi-vowels）と呼ばれている /j/ と /w/ に関する分析は、その半母音の特質を考慮に入れると、他の言語音より困難を極めたと想像することができよう。Gimson's *Pronunciation of English* の Cruttenden による改訂版（第6版）によると、半母音は音声学的観点からみれば一般に母音的であるが、その機能の観点からみれば、音節の中で周辺的位置を占めるため子音的である（210）。彼らにとって簡単には理解しがたいこの特質を備えた半母音を彼らはいかに分析しただろうか。本稿では、この議論をする際に不可欠な二重母音の分析も含め、具体的な資料を基に考察していきたい。

この領域における先行研究には、John Wallis's *Grammar of the English Language*（1972）において、J. A. Kempが16、17世紀の半母音の扱われ方を考察した小論があるが、この論考の分析は文法家 John Wallis（1616 - 1703）による w と j の記述の分析に重点を置いたもので、当時の半母音の包括的な分析としては不十分である（Introduction 56-57）。初期近代英語の音を包括的に扱った Dobson（199-311）、古典期からの音声学者の業績を論じた Kemp（“Phonetics” 9: 470-89）等に

キーワード：音声学、17世紀、半母音、[j] [w]

Key words : Phonetics, Seventeenth Century, Semi-vowel, [j] [w]

よる研究のこの領域に関する資料は、示唆には富むが断片的である。特に後者Kempからはこの領域に関する情報はほぼ得られないと言ってよい。したがって、17世紀の音声学者がいかに半母音を分析しているか、包括的な研究を行うことには意義があろう。

## 2. 古典期から16世紀までの半母音の記述

上述した通り、半母音/j/と/w/は音声学的観点からは一般に母音的であるが、他方、その機能の観点から音節の中で中心的位置を占めるといよりは周辺的位置を占めるため子音的であり、通常子音に分類される（Gimson 210）。Gimsonによれば、半母音、つまり非円唇硬口蓋接近音（unrounded palatal approximant）の/j/と唇軟口蓋接近音（labial-velar approximant）の/w/は「より長い期間安定して継続する音節主音へと素早く移行する母音的わたり音」（a rapid vocalic glide onto a syllabic sound of greater steady duration）である。英語では、例えばyear, west, inward, spanielの語にみられるように、およそ/i:/（張唇か弛唇）と/u:/（円唇）の位置から移行が始まる（210）。現在の容認発音において、前者/j/の異音の舌の位置は、後続音の開きの程度次第で前舌半狭母音から前舌狭母音までの間のいずれかになり（Gimson 211）、後者/w/の異音の舌の位置は、後続音の開きの程度次第で後舌半狭母音から後舌狭母音までの間のいずれかになる。/w/は、調音の際に両唇と軟口蓋で調音器官が接近し、同等のふたつの狭窄が生じるため、二重の調音位置を持つと考えられている（Gimson 214）。

/j/と/w/は直後に母音を伴い、[j+i]（Yiddish）、[j+e]（yet）、[w+i]（wit）、[w+e]

（wet）などの音結合群を形成する。確かに/j/と/w/は音節の中で周辺的位置を占めるといえるが、音声学観点から母音性を保持しているため、この音結合群を二重母音とみなすこともできる。同様な観点から、逆に異論はあるものの、一般的に二重母音とみなされている[eɪ], [aɪ], [aʊ], [au]を単純な音節主音+子音的な/j/と/w/の音結合群ととらえ、/ej/, /aj/, /əw/, /aw/と表記する見方もある（Gimson 93-94）。

古典語の文法家による半母音の記述からは、その調音などに関する詳しい記述は得られない。ラテン語文法家プリスキアヌスは*Institutiones grammaticae*にて、母音iとuは音価と働きが異なる子音に変わることがあると述べている。彼の説明によると、Iuno, Iuppiterにみられるように母音iは語頭の音節初頭にて同一音節内に母音を伴うと子音[j]になり、maius, peius, eiusにみられるように語中の音節初頭にて同一音節内に母音を伴うと、二重子音[jj]として用いられる（Keil 2: 13-14）。[w]の音の説明はギリシア文字Ϝ（digamma）から始まる。この音は、ギリシア語と同様に、ラテン語でも単独で、あるいは二重に発音されると説明されている（Keil 2: 15-16）。

16世紀に世に現れた初期の綴り字改革者と文法家の半母音に対する見解は、[j]と[w]を母音とみなすものから子音とみなすものまで様々である。彼らの主なる関心は、綴り字改革や英文法の確立にあり、彼らの言語音の記述は概して副次的で、断片的なものに過ぎず、そこから詳細な説明は得られない。古典語期と同様に彼らが用いるlettersあるいはlitterae（文字）という語はまだ記号としての文字と音そのものを同時に内包している。

したがって、彼らの文字と音の区別は現在の言語学の観点から考えれば極めて曖昧で、言語音に関する詳細な科学的考察が彼らの記述から見受けられる例は多くない。

Thomas Smith (1513-77) と John Hart (d. 1574) は [j] と [w] を母音ととらえ、ゆえに [j] + 母音、[w] + 母音を二重母音とみなしている。Smith が *De recta et emendate linguae scriptione, dialogus* (1568) において二重母音として挙げているものは、boi (ModE boy) の oi, bou (bow v.) の ou, dai (day) の ai, au (awe) の au, peint (paint v.) の ei, feu (few) の eu のみならず、さらに iard (yard) の ia, yet の ie, ionder (yonder) の io, iung (young) の iu, uat (wat 野ウサギ) の ua, uel (well) の ue, vil (will) の ui, vound (wound) の uo, vulf (wolf) の uu である (14<sup>v</sup>-19<sup>v</sup>)。このように [j] と [w] を i と u によって表記していることから、Smith は [j] + 母音と [w] + 母音の組み合わせにおいても [j] と [w] を母音ととらえていることがうかがわれる。彼は、文字 i と u を子音とみなす文法家の意見を以下のように的確に代弁している。そもそも子音は「母音とともに響くもの」(con (ともに) + sonans (響くもの)) である。したがって、ラテン語 *blaesus*, *Caesar*, *gaudeo*, ギリシア語 *kai*, *dai* のように子音はよく二重母音の前に置かれる。しかし、一般に二重母音とみなされているものの第一要素が i と u である場合、すなわち i + 母音と u + 母音の場合、子音はその前に置くことはできないことがある。この場合、いわゆる二重母音の第一要素 i と u が子音の働きをしているからである。この Smith とは対峙する意見に対して、Smith はラテン語 *suavis*, *suadeo*, *suadela* や *qui*, *quae*, *quod*, *quid*, *quare* という語を挙

げて反論する (19<sup>v</sup>) が、彼の反論は説得力に欠ける (Dobson 52)。

John Hart の半母音に対する見解も Smith と同様である。彼は *An Orthographie* (1569) において音声に基づいて考案した彼独自の英語の文字から文字 y と w を除外し、その代わりにそれぞれ i と u を使用するよう提唱している (35b)。同様に、彼は母音に先行する [j] と [w] も母音と考えて、ふたつの母音から成ると定義された二重母音の中に [j] + 母音と [w] + 母音の組み合わせを含め、その例として *ionder* (ModE *yonder*), *iung* (*young*), *ieu* (*yowe*), *ui* (*we*), *uil* (*will*), *uel* (*well*) などを挙げている (43b)。

Smith と Hart の見解とは逆に、William Bullokar (c. 1530-c. 1590)、Richard Mulcaster (c. 1530-1611)、Alexander Gill (1564, 65-1635) は [j] と [w] を子音ととらえ、[j] + 母音、[w] + 母音を二重母音とみなしていない。17世紀に出版されているが、前世紀の思想の影響を多く受けている文法家 Gill の *Logonomia Anglica* (1619) によれば、w と y の文字は *water*, *wurd* (ModE *word*), *yarn*, *yelk* (*yolk*) のように母音の前では子音として機能するのに対し、*straw*, *law*, *joy*, *they* のように母音の後では母音として機能し、先行する母音とともに二重母音を形成する。<sup>1</sup> ゆえに、この二文字は文字として「これまで不安定な位置」(*incertas hactenus sedes*) を占めている。語頭の w と y が子音である裏づけとして、先行する不定冠詞と人称代名詞が *an water*, *mjn wurd* (*mine word*) とは用いられず、*a water*, *mj wurd* (*my word*) と用いられることを提示している点は興味深い (9-10)。

Richard Mulcaster も *The Elementarie* (1582)

にてGillと同様の見解を示し（127-31）、彼が提唱している新たな英語の体系において、yとwをともに母音と子音両方の働きをする文字と位置づけている（122）。William Bullokarが*Booke at Large*（1580）において提唱している新正書法では、アルファベットyとwにそれぞれ [j] と [w] の音価が付与されている（21）。彼も同様に [j] と [w] を子音ととらえているが、彼の [w] に対する見解がSmithとHartと異なると明記している点（5-6, 8）、二重母音は [j] や [w] からは始まらないと読者に注意を促している点（22）は注目に値する。

16世紀から17世紀初頭にわたる綴り字改革者と文法家の中で、明確な根拠を指示されていないものの、SmithとHartが [j] と [w] を母音ととらえ、それゆえに [j] + 母音、[w] + 母音を二重母音と考えたことは当時の特徴と言えよう。他方、Bullokar, Mulcaster, Gillは [j] と [w] を子音としてとらえ、[j] + 母音、[w] + 母音を二重母音の中に組み入れていない。[j] と [w] が子音である根拠として、Gillがwaterに先行する不定冠詞がanではなくaであることを提示した点には、彼の深い洞察力が見受けられる。このように彼らは通常半母音についての見解の根拠を明確に提示することもなければ、その音の調音に関して説明することもなかった。言語音の記述が副次的なものに過ぎない彼らにとっては、当時としては卓越した言語音の分析を行ったHartを除いて、この程度の簡単な説明で十分であった。

彼らの半母音の分析では半母音が母音か子音かという問題が取り上げられているため、ここで彼らの母音と子音の概念についてつけ加えておきたい。彼らの中には母音

と子音に対して定義らしきものを何ら提示していないものもいるが、この事実は彼らの概念が古典語の文法家を踏襲していることを示唆しているとみなしてよい。古典期の概念を受け継いだBullokarの典型的な定義によると、母音は「それ自体で音つまり声を生み出し、音を子音と結びつかせる」（yéedeth sound or voice of themselues, and cause sound to be ioined with the consonants）もの、一方、子音は「単語や音節内で音を生み出さず、その子音とともに鳴る母音なしで名前をつけることもできない」（yéedeth no sound in word or sillable, nor can be named without a vowell sounded with them）ものと考えられている（21-22）。<sup>2</sup> この古典期からの子音の概念は子音が音節の中で周辺の位置を占めることを暗示していて、彼らの半母音の論議にも有益であると思われる。しかし、彼らが半母音を説明する際、あらためてその点を強調することもなければ、言及することさえない。

### 3. 17世紀の音声学者の [j] と [w] の記述

古典期から16世紀までの半母音の分析を踏まえた上で、古典期の伝統から脱し、言語の科学的考察を目指した17世紀の音声学者によるこの音の分析に考察を移したい。第一次資料としてJohn Wallis（1616-1703）、John Wilkins（1614-72）、William Holder（1616-98）、Christopher Cooper（d. 1698）の著作を取り扱う。彼らは概して母音と子音の主要な相違を調音器官による息の閉鎖の有無にあると考えている。Cooperの*The English Teacher*（1687）によると、母音は「息の遮断なく自由な放出によって生み出される豊かで完全な

音」(“a full and perfect sound made by a free and open emission of the Breath”) (3)であり、一方、子音は「息を圧縮したり遮断したりする調音器官の閉鎖あるいは近接によって」(“by a closing or appulse of the Instruments of Speech compressing or intercepting the breath”) (18) 調音される。つまり、母音は調音器官によって息の遮断なく発する音であり、子音は調音器官による閉鎖あるいは近接によって生み出される音である。

### 3.1. John Wallis, *Grammatica Linguae Anglicanae* (1st ed. 1653; 6th ed. 1765)

*Grammatica Linguae Anglicanae* (6th ed. 1765)<sup>3</sup>において、Wallisはyとwの文字で表された音をそれぞれ子音 [j] と [w] とみなし、yとwが母音であるという考えを退けた。ただし、yと母音 *ī* exile (細い *ī*) [i] を素早く発音した音との間と、wと英語oo、仏語ou、独語 *û* pingue (太い *û*) [u] を素早く発音した音との間には著しい類似が見受けられることは認めている (20- 21、31- 32)。

“De Sonis Compositis” (「複合文字について」) の節では、Wallisは二重母音の一要素であるyとwも同様に子音ととらえている。二重母音ay, ey, oy, aw, ew, owは「前置された母音」(“Vocales Praeposita”) と子音yあるいはwで構成されると考えられている。他方、want, went, winterにみられるように、二重母音の第一要素として母音の前に置かれているyあるいはwも子音として記されている (47- 48)。ここで注目すべき点は、十分な説明はされていないものの、子音y [j] と英語でeeと綴られる母音 *ī* [i] の音声上の相違と、子音w [w] と英語でooと綴られる母音 *û* [u] の音声上の相違を明確にしようという試みが

うかがえることである。Wallisによれば、yee [ji:] とwoo [wu:] の音を数回繰り返し言うとき、子音y [j], w [w] がそれぞれ母音 *ī* [i], *û* [u] を素早く発音した音と同じ音価ではないことが簡単にわかる。なぜなら、子音y, wから次の母音 *ī*, *û*へ移行する際に、「音声器官の明確な動きと新たな位置」(“Organorum manifesto motu (adeoque nova positione)”) を伴うからである。この動きはee ee, oo ooの音をそれぞれ繰り返すときには起こらないのである (36- 37)。

子音yとwは調音位置の観点からそれぞれgutturales (喉頭音) とlabiales (唇音) に分類される。このふたつの子音は息の方向の観点からともにsemi-mutae (半母音) に分類され、息の方法の観点からともにpinguiore (太い音) に分類される。表1にみられるように、彼の子音の分類法は母音と同様、基本的に3分法に基づいている。子音はその調音位置の観点からlabiales (唇音)、palatinae (口蓋音)、gutturales (喉音) に三分される。さらにそれぞれの範疇は、その調音法、つまりWallis特有の呼気の方向の観点から、息がすべて口腔を通り唇から吐き出されるmutae (黙音)、息がすべて口腔と鼻腔に等しく吐き出されるsemi-mutae (半黙音)、息がほぼすべて鼻腔を通り鼻から吐き出されるsemi-vocales (半母音) に三分される (13- 14)<sup>4</sup>。息の方向は口蓋垂 (uvula) の位置によって決定されるとWallisは考えている。

この調音位置と呼気の方向の基準から生じた9種の子音は、息がある調音位置で完全に閉鎖される子音と息は閉鎖されないが絞られ、吐き出される子音に二分される。前者はconsonae primitivae (根源的な子音) あるいはconsonae clausae (閉じた子音)、後者

表1 Wallisによる子音の分類表（Wallis 35）

Consonae					
Labiales	Muta	P [p]	F [Φ] (or [f])	F [ɸ]	
	Semi-muta	B [b]	V [β] (or [v])	W [w]	
	Semi-vocalis	M [m]	Mugitus		
Palatinae	Muta	T [t]	S [s]	Th [θ]	
	Semi-muta	D [d]	Z [z]	Dh [ð]	L [l] R [r]
	Semi-vocalis	N [n]	Gemitus		
Gutturales	Muta	C [k]	Ch [x]	H [h]	
	Semi-muta	G [g]	Gh [ɣ]	Y [j]	
	Semi-vocalis	N [ŋ]	Groan		
			Subtiliores	Pinguiores	
Primitivas (Clausas)			Derivatives (Apertas)		

（各括弧の中に付したものは推定される音価である。）<sup>5</sup>

はconsonae derivativas（派生的な子音）あるいはconsonae apertae（開いた子音）と称されている（14）。後者はmutaeとsemi-mutaeに関する限り前者の氣息形と説明されていて、息が横長の隙間から吐き出される subtiliores（繊細な子音）つまり tenuiores（細い子音）と息が丸い穴のようなものから吐き出される crassiores（厚みのある子音）つまり pinguiores（太い子音）に分けられる（18）。

上述した通り、現在の音声学では、[w]の調音の際、両唇と軟口蓋のふたつの位置で調音器官が接近し、同等の狭窄が生じるため、[w]は二重の調音位置を持つと考えられている。Wallisはwの音が、同様にlabialesに分類されている母音û pingueと類似していると説明していることから、wの調音位置を両唇に特定しているが、軟口蓋には言及していない。彼の解釈によれば、wは「(頬を緊縮させて、口を円くして) 息が丸い穴のようなものを通して吐き出され」(“Si vero spiritus per foramen rotundum exeat (genis nempe contractis, et ore rotundato)”) 調音される（20）。この記述から、Wallisはpinguioresの

特徴として円唇性に注目していることがわかる。

現在の音声学で硬口蓋接近音とみなされている [j] がgutturalesの範疇に分類されているのは正確とは言えない。この音は喉頭あるいは軟口蓋では調音されないからである。このyが、上述した通り、palatinaeに分類されている i exileを素早く発音した音と類似していると説明されていること、さらに i exileとyの関係が û pinguiとwの関係と同じであると説明されていることから考えても、この子音はpalatinaeに分類されるのが妥当である。この間違った分析は、おそらく言語音の分類に、彼が極めて厳密な体系化を求めたことに起因すると言えよう。Wallisは、彼の子音の体系において、実際のところ、現在の音声学で称される唇音と唇歯音をlabialesに分類し、歯茎音と歯音と後歯茎音をpalatinaeに分類している。そのため、labialesとpalatinaeの範疇にはyを入れ込む余地はなく、yをgutturalesの範疇に分類せざるを得なかった可能性が高い（Dobson 232; Kemp, Wallis 189, note 83）。yが「息がもっ

と遮断されることなく、幾分幅の広い穴を  
通って吐き出され] (“Si vero liberius et quasi  
per latius foramen exeat spiritus”) 調音され  
るといふ記述からも *pinguiores* の特質がうか  
がえる (31)。

### 3. 2. *John Wilkins, An Essay towards a Real Character, and a Philosophical Language (1668)*

John Wilkinsが<sup>3</sup>*An Essay towards a Real  
Character, and a Philosophical Language*  
(1668) にて提示した言語音の体系において、  
[j] と [w] を表す記号としてそれぞれ *i* と *ø*  
が使用されている (360)。彼の記述を総合的  
に解釈すれば、*i* は [j] のみならず [i]、[i:]  
の音も表す記号として、*ø* は [w] のみならず  
[u]、[u:] の音も表す記号として使用され  
ていることがわかる (Dobson 255)。本来、  
単音に対しひとつの記号を充てるはずであ  
った彼の体系内で、このように同一記号が母音  
と子音を表すために用いられることは特異で  
あり、ここには前世紀の綴り字改革者と文法  
家の記述の影響の一端がうかがえる。

彼の分析によれば、この *i* と *ø* は母音と子音  
の「中間の性質を帯びた」 (“*mediae potestatis*”  
360, “*Of a middle nature*” 358) 音である。こ  
れらの音は、母音と結合し、いわゆる二重母  
音を形成する場合には子音の性質を帯び、そ  
のような結合をせずに単独で使われる場合は  
母音の性質を保持する。この性質から、これ  
らの音が母音なのか、あるいは子音なのか、  
学者の間で議論が絶えないと Wilkins はつけ  
加えている。

しかしながら、このように *i* と *ø* は母音と子  
音の中間の性質を備えているものの、子音と  
いうよりはむしろ母音に近い性質を帯びた音

ととらえられていることを忘れてはならない。  
彼の考案したすべての単音の体系では、まず  
すべての単音は母音と半母音と若干の子音か  
ら成る *Apert* (開いた音) とその他のほぼす  
べての子音から成る *Intercepted* (閉じた音)  
に2分され、さらに *Apert* は下位区分として、  
開きの程度の差によって *Greater* (開きが大き  
な音) (*o*, *u*, *a*, *æ*, *e*) と *Lesser* (開きが  
小さな音) (*ø* ([w], [u], [u:]), *ι* ([j], [i],  
[i:]), *y* ([ʌ]), *hø* または *øh* ([ʌ]), *hi* ([ç]),  
*h* ([h])) に2分される (360)。Wilkins の説  
明によれば、母音は「開いた文字」 (“*Apert  
or open Letters*”) と呼ばれ、「その発音の際、  
息が調音器官により遮断されることなく放た  
れる」 (“in pronouncing of which [vowels] by  
the Instrument of Speech, the breath is freely  
emitted”) 音であり (363)、一方、子音は「閉  
じた文字」 (“*Clausae Literae*”) と呼ばれ、「そ  
の発音の際、調音器官の間でなんらかの衝突  
あるいは閉鎖によって息が遮断される」 (“in  
the pronouncing of which [consonants] the  
Breath is intercepted, by some Collision or  
Closure, among the Instruments of Speech”) 音  
である (366)。したがって、*i* と *ø* が *Apert*  
の中の *Lesser* に分類されていることから、分  
類上、この *i* と *ø* は母音に近い性質を帯びた音  
としてとらえられていると言える。そのよう  
な性質を帯びていながらも、これらの母音が  
子音に近い性質を帯びているのは、「*i* と *ø* が母  
音の中で最も緊縮しているため、閉じた文字、  
つまり子音の性質に近似する」 (“because  
being the most contract of Vowels . . . , they [i  
and ø] do therefore approach very near to the  
nature of *Literae clausae*, or Consonants”) からの  
ことである (370)。

Wilkins は *ø* を「より緊縮した両唇から息が

吐き出されることによって」(by an emission of the breath through the Lips, more Contracted) 発音されると説明している(360)が、この彼の記述にはWallisと同様、軟口蓋の調音位置についての言及がない。ゆえに、 $\text{ʃ}$ はgutturals（喉頭音）ではなくlabials（唇音）に分類されている。iについては、「息がより凸状の形をした舌の中部と硬口蓋の間を通過して吐き出される」(the breath is emitted betwixt the middle of the Tongue in a more Convex posture, and the palate) ことによって調音されると記述されている(360)。lingualsに分類されているこのiの記述には、硬口蓋音としての特性がうかがえる。

「複合文字」(“compound letters”)を扱った章では、Wilkinsはいわゆる二重母音に関してふたつの相反する見解を紹介している。ひとつ目の見解はThomas Gataker等によって唱えられている。彼らの見解によれば、一般に二重母音と呼ばれているものに不可欠な要素であるiと $\text{ʃ}$ はy [j] とw [w] の音価に相当する子音であり、それゆえにふたつの母音から成る二重母音というものはそもそも存在しないのである。もう一方の見解はWilkins自身も支持しているもので、二重母音の存在を認めている。この見解の根底にはiと $\text{ʃ}$ が母音と子音の中間の性質を保有しているという考えがある。その見解によれば、母音iと $\text{ʃ}$ が二重母音の一要素となることができるのは、両母音が母音の中で最も緊縮し、子音の性質に近似しているからである。つまり、両音には子音の形成に必要とされる調音器官の衝突(Collision)に幾分類似した動きがあるからなのである(370)。

二重母音については、母音iと $\text{ʃ}$ は、yall, yawneのia, yate, yarrowのia, wallの $\text{ʃ}\alpha$ , wale

の $\text{ʃ}\alpha$ のようにもうひとつの母音に前置される(“preposed”)か、boyの $\alpha i$ , Ayの $\alpha i$ , awの $\text{ʃ}$ のように後置されるか、あるいは、yeeのu, wooの $\text{ʃ}\text{ʃ}$ , youの $i\text{ʃ}$ , weeの $\text{ʃ}i$ のようにふたつの母音のみで構成されると具体的に説明されている(370-71)。

### 3. 3. William Holder, *Elements of Speech* (1669)

Wilkinsの半母音の見解と同様、William Holderは*Elements of Speech* (1669)において母音iと $\text{ʃ}$ が特別な性質を持っているととらえている。Holderの見解によれば、両音は「調音器官の強い緊張と張り詰めた状態」(“a strong Tension and firm posture of the Organ”)で、前者は舌により、後者は唇により「ほぼ閉鎖に近い状態」(“almost an Appulse”)を作り出すことによって調音される。そのため、両音は「その開いている状態」(“the Aperture”)の点から考えれば母音であり、「そのほぼ閉鎖している状態」(“the *pene-appulse*”)から考えれば子音である(91)。このようにこれらの音が母音と子音の中間の性質を帯びていることをHolderは「一種の自然の気まぐれ」(“a kind of *Lusus Naturae*”)と称した。この単純だが曖昧な性質が文法家の間で度重なる議論を呼び、二重母音に関する誤った考えを生んだと彼は指摘している(93)。

母音と子音に対するHolderの見解を理解するためには、「自然」(“Nature”)から賦与された「発話の容易さと平易さ」(“the *Readiness and Easiness of Speech*”)という彼独得の考え方を考察する必要がある(91)。この考え方によれば、同一音節内に母音と子音が混在すると、発話は母音と子音から

構成されるので容易である。ひとつの母音が、同一音節内で、あるときは子音の先行し、あるときは子音の後に続き、またあるときは子音の間に置かれて、「息を抑制したり、保ったり、母音の調音のために器官が開いた時に素早い勢いで息を吐き出したりすること」(“checking and reserving the Breath, and letting it pass with a quick impulse at the Aperture of the Organs for the Vowel”) によって音に「勢いと重み」(“a vigor and emphasis”) を与える。「開き」(“Apertures”) と「閉鎖」(“Appulse”) が混在することによって調音器官の動きがさらに容易になるのである(92)。もし発話が母音のみで構成されれば、母音間に途切れ (“hiatus”) を生じるため明瞭に話すことができず、早く息を使い果たす。子音のみで構成されれば、「声」(“voice”) が減少し過ぎて、ある音節から次の音節への移動が困難になる(92)。ここでHolderが母音と子音の働きを音節や発話などの大きな単位の中で考察していることは興味深い。

Holderは、iとɸが「子音の位置と性質」(“the place and nature of Consonants”) を与えることを根拠に、iあるいはɸが一要素である、従来から二重母音と呼ばれているものを二重母音 (“Diphthongs”) ではなく音節 (“Syllables”) とみなしている。Holderの理論によれば、iとɸが「子音の位置と性質」を与える理由はふたつある。第一の理由は、両音の発音の際、調音器官によって「Pervious Consonants [閉鎖音以外の子音 (鼻音閉鎖音を含む)] の場合より息を多くせき止めるように息の通り路を狭めること」(“streitning the passage of Breath, so as to check it not much less, than is done by some of the *Pervious Consonants*”) であり、これは「閉鎖」(“Appulse”) を特徴

とする子音の性質を示している。第二の理由は、「*ia*, *ɸa*つまり*ya*, *wa*を発音する際に明白なことだが、[iとɸが] 他の母音へ移行する際の [調音器官の] 開きに鋭い一撃を加えること」(“making a smart stroke at the Aperture in passage to another Vowel, ..., as is evident in pronouncing *ia*, *ɸa*. *id est ya*. *wa*”) である。この「一撃」は「他の子音の調音の際に調音器官が衝突するというよりはむしろ引き離されることに相当する」(“answerable to the Collision, or rather Divulsion of the Organs made by other Consonants”) (93-94)。この考察は音節初頭における半母音の働きの視点から導き出されたものである。このようにHolderがiとɸが「子音の位置と性質」を持つという理由から、iあるいはɸが一要素である、従来から二重母音と呼ばれていたものが二重母音であることを否定するのは妥当な解釈ではあるが、その音結合を音節と考えるのは現在の言語学の観点からは無理がある。確かにそれは音節には違いないが、そもそも次元の異なる問題である。しかしながら、iとɸの働きを音節や発話などの大きな単位の中でとらえようとしている点において、このHolderの分析は半母音に対する優れた洞察力を示している。

母音iとɸの調音の記述に関するHolderの説明は以下の通りである。母音iは、口の開きと調音位置からみれば、母音の中で「最も閉じた、最も前舌の」(the closest and forwardest) 音であり(89)、「[母音eと] 同じ方法だが、舌の筋肉が、[母音eよりも] 強く、張り詰めた緊張を伴って、硬口蓋に近接したところで舌を保ち、舌の側面が脇の歯に当たって」(after the same manner [as the vowel e], but with a stronger and firmer Tension of the

Muscles of the Tong bearing it stifly very near the Palat, and resting the sides of the Tong against the side-Teeth) 発音される (86)。ここで母音*i*と比較された母音*e*の調音については、「口蓋の中部が舌の幅によって狭められ、したがって舌尖がさらに前の方へ動く」(the middle of the Palat is streitned, by the breadth of the Tong, and therefore the end of the Tong carried yet forwarder)と説明されている(85)。一方、母音*o*は「喉頭を押し下げるか、むしろ器官の収縮によって後ろに押しやり」、(the Larynx is depressed, or rather drawn back by contraction of the Aspera Arteria)、「舌を同様に後ろに押しやり、反り、丸い通路をつくるために咽頭を大きく開けて」(the Tong likewise is drawn back and Curved; and the Throat more open to make a round passage)つくられる(86-87)。続いて、*oo*は「舌と咽喉を*o*と同様の状態に保ち、喉頭を幾分さらに押し下げられた状態」(“a like posture of the Tong and Throat with *(o)* but the Larynx somewhat more depressed”)で調音されるが、その*oo*の状態で「上下の唇を緊縮させると同時にしっかりと近くまで寄せ合えば」(if the Lips at the same time be contracted, and born stifly near together)、*ø*の音が生み出されるのである。この [w] の記述にも円唇性が指摘されている。

### 3. 4. Christopher Cooper, *The English Teacher* (1687)

WilkinsとHolderの半母音の見解とは異なり、Christopher Cooperは*The English Teacher* (1687)において [y] と [w] を子音に分類し、母音とは明確に区別している。Cooperの半母音の分析はこれまで考察してきた音声

学者の中では最も精緻で、近代の分析に近いと言えよう。彼の子音の分類では、子音は「完全な息の閉鎖」(“a total intercepting of the Breath”)によって調音される子音と、息を圧縮するか、あるいは「部分的に息を遮断する」(“partly intercepting the Breath”)ことによって調音される子音に分かれる。前者はさらに下位区分としてsemi-mutes（半黙音：現代の有声閉鎖音）とmutes（黙音：無声閉鎖音）に分かれ、後者はsemi-vowels（半母音：有声閉鎖音以外の有声子音）とaspirated（氣息音：無声閉鎖音以外の無声子音）に分かれる。したがって [y] と [w] はsemi-vowelsに分類され、それに対応する無声音はaspiratedに分類されている。Cooperの解釈によれば、aspiratedとsemi-vowelsの相違は息の強さにあり、aspiratedの方がsemi-vowelsよりも「息が圧縮され、強く吐き出される」(“the breath is more compress'd and strongly emitted”) (18)。

母音*i*、母音*ee*はlingual（舌音）に分類されている(6)が、子音*y* [j] は、その分類上の範疇がさらに限定され、舌と硬口蓋でつくられる子音lingua-palatineに分類されている。Cooperの記述によれば、子音*y*は「舌の中部が、*ee*を形成するよりも高い位置で、口蓋の窪みに向かって、息が勢いよく出されてつくり出される」(“framed by the middle of the Tongue to the hollow of the Palate, higher than in forming *ee*, and the breath emitted with greater force”) (21)。子音*w* [w] は、母音*o*、母音*oo* (7-8)と同様、labial（唇音）に分類されている。この子音は「両唇を大いに緊縮させて円め、*oo*を形成するよりも息を前に勢いよく出して」(“the Lips very much contracted round, and the breath emitted

more forward and with greater force than in forming oo”) 発音される (20)。母音ooと同様、もうひとつの調音位置である軟口蓋についての言及はない。yとwと調音が比較されている母音eeと母音ooの音は、「母音の中で最も閉じた」(“the closest of all Vowels”) 音で「子音の性質に最も近い」(“nearest to the nature of consonants”) と説明されている (14-17)。このyとwの記述において、Cooperは母音eeと子音yの調音上の相違と母音ooと子音wの調音上の相違が主に舌の位置 (yの場合)、唇の状態 (wの場合)、息の勢い (両子音の場合) にあると分析している。

一方、別の箇所では、その相違が調音位置や調音器官にあるのではなく調音法にあることを強調している。Cooperによれば、ee [i:] あるいはoo [u:] を他の母音の前で10度素早く繰り返して言ったとしても、yee [ji:] あるいはwoo [wu:] の音にはならない。しかし、息をまっすぐに勢いよく口から吐き出せば、eeあるいはooは子音の性質を帯びるという。この根拠としてCooperは、母音ee、ooと子音y、wの相違が、彼が提唱した分類上の範疇semi-vowelsとaspiratedの相違と同じだと説いているが、この比較は現代の音声学的見地から考えれば不適切である。(17-18)。このふたつの範疇の相違はそれぞれ同一の調音位置で同一の調音法の有声音と無声音の相違に相当するからである。しかし、彼の音声学的見解からみれば、上述した通りその相違は吐き出す息の強さにある。aspiratedつまり子音y、wの方がsemi-vowelsつまり母音ee、ooより「息が圧縮され、強く吐き出される」のである (18)。このように、これらの子音と母音の相異を息の強さのみに帰することはいささか短絡的である。

Cooperが二重母音と認めるものは、その第二要素が母音eeあるいは母音ooの音で、その母音に他の母音が先行する組み合わせのみである。母音eeの音が第二要素の二重母音はai, **ai**, ei, oi, oi, uiの6つで、「第一等級の二重母音」(“the first rank of the Diphthong”) と称され、母音ooの音が第二要素の二重母音はau, **au**, eu, ou, ou, yuの6つで、「第二等級の二重母音」(“the second Classis of Diphthongs”) と称される。上述したように、母音eeと母音ooの音は「母音の中で最も閉じた」音で「子音の性質に最も近い」ため、他の母音の後に置かれる (14-17)。

他方、Cooperはya, ya, ye, wa, wa, weなどの音を二重母音とは認めない。彼は最初の音の子音 [j] あるいは [w] ととらえており、母音eeあるいは母音ooととらえてはいない。なぜならば、母音eeと母音ooはその性質上他の母音に先行できないからである。もし母音eeあるいは母音ooが母音に先行したならば、「口の中に息を溜め込み過ぎ (その音は主にそこに留まるのであるが)、息が後に置かれた母音と結合するために前に吐き出されない」(“the breath being so much kept in and bounded in the mouth (where the sound chiefly remains) it does not pass forward, so as to unite with Vowels that are set after them”)。上述した通り、子音y、wは母音ee、ooよりも息が強く吐き出されるため、このような状態は生じない (17)。

#### 4. 結 論

[w] と [j] の音が母音であるのか子音であるのか、当時文法家の間で度重なる議論を呼んだとWilkinsとHolderが指摘していたように、言語音を科学的な考察に基づいて行う

ように試みた17世紀の音声学者の間でもこの半母音に対する見解は意見の一致をみていない。Holderが「一種の自然の気まぐれ」（“a kind of *Lusus Naturae*”）と称したこの特別な性質を備えたために、半母音は他の言語音に比べ、彼らには解釈し難い言語音であった。

WilkinsとHolderはともに*i*と*ɨ*のふたつの記号に母音と半母音の両方の音価を付与している。このような表記法には、文字と音の明瞭な区別ができていない古典期からの影響がうかがえる。彼らの言語音の体系では、この両音を基本的には母音と位置づけられているが、本来母音と子音の中間の性質を帯びた音であるため、子音として機能することもあると考えられている。このように*i*と*ɨ*の基本的な性質に対しては、彼らの見解は一致しているが、一般的に二重母音と呼ばれているものに対しては彼らの見解は対照的である。Wilkinsにとって*i*あるいは*ɨ*と他の母音を結合した音は二重母音であり、この場合母音*i*と*ɨ*は子音の性質に近似すると考えられている。一方、Holderにとっては*i*あるいは*ɨ*と他の母音を結合した音は二重母音ではない。*i*と*ɨ*は、調音の際に調音器官によって息の通り路が狭くなること、かつ、他の母音への移行時の調音器官の開きに迅速な一撃を与えることから、子音と考えられるのである。このふたつの理由は子音の特徴である閉鎖ならびに音節での子音から母音へ移行する際の子音の働きを指摘していて、興味深い。注目すべきことは、Holderが母音と子音の中間の性質を帯びた半母音を音節や発話などの大きな単位での母音と子音の働きという観点から考察し、半母音が音節の中で子音の働きをしていることを示したことである。しかし、このように音節に着目しながらも、半母音が音節の

中で周辺的な位置を占めることに言及していない。

半母音を含む複数の音に対して同一の記号*i*と*ɨ*を用いたWilkinsとHolderとは異なり、WallisとCooperはともに [j] と [w] をそれぞれ独立した記号*y*と*w*で表記し、その音をともに子音に分類することにより伝統的な表記法から脱することに成功している。しかしながら、二重母音に対する彼らの考え方も互いに異なっている。Wallisは、母音+*y*あるいは母音+*w*のみならず*y*+母音あるいは*w*+母音も二重母音ととらえ、その両方の場合において*y*と*w*が子音の働きをすると考えている。他方、Cooperは、*y*+母音あるいは*w*+母音は*y*と*w*が子音であるため二重母音から除外し、母音+*ee*あるいは母音+*oo*を二重母音とみなした。

半母音が属する範疇は17世紀の音声学者の言語音の体系の中で確固とした位置を占め、前世紀には見られなかったその調音の記述も試みられるようになった。[j] に関しては、Wilkinsは [j] をlingual（舌音）に、Cooperは舌と硬口蓋でつくられるlingua-palatineに分類し、さらに、Holderはこの音の調音の際、舌で閉鎖に近い状態が作り出されると説明している。このようにこの音は舌との関連で説明されているが、さらに詳細に考察すれば、Holderは舌と硬口蓋で、WilkinsとCooperは舌の中部と硬口蓋で調音されると記している。[w] は、Holder以外、唇音（labialsまたはlabiales）に分類されている。Holderもこの音の調音の際、唇で閉鎖に近い状態が作り出されることを指摘している。このように、この音の円唇性からどの音声学者も [w] の調音の記述の際に両唇に着目しているが、この二重調音によってつくり出される [w] のも

うひとつの調音位置である軟口蓋についての言及がいずれの音声学者の記述にも見受けられない。

WallisとCooperが [j] あるいは [w] とその両音と類似している母音との相違を音声学的な観点から区別しようと試みているのは注目に値する。Wallisは、その相違を明確には示していないながらも、yee [ji:] あるいは woo [wu:] から母音ee [i:] あるいはoo [u:] へ移行するには「音声器官の明確な動きと新たな位置」(“Organorum manifesto motu (adeoque nova positione)”)を伴うため、子音y [j], w [w] が母音i [i], u [u] を素早く発音した音と同じ音価ではないと説いている。Cooperがさらにその相違を明瞭にしていることには、Cooperの言語音に対する洞察力の深さが見受けられる。Cooperはその相違を吐き出す息の強さに帰し、y [j], w [w] はそれぞれee [i:], oo [u:] よりも息を強く吐き出して発音されると説明している。彼による個々の言語音の調音の記述ではその相違をさらに詳しく述べられている。yはeeよりも舌の中部が高い位置で発音される一方で、wはooよりも前で発音されると述べられている。

17世紀の音声学者による科学的考察に基づく言語音の分析によっても、半母音は他の言語音に比べ分析が困難であったと思われる。全般的に見て、16世紀に続き、半母音に関する彼らの記述に統一性がないこと、WilkinsとHolderが、従来の影響を受け、母音と半母音に対して同一の記号を使用したこと、どの音声学者も [w] の調音の説明に唇についての言及はあるが、もうひとつの調音位置である軟口蓋についての言及がないこと、[j] と [w] を一要素に含んだ二重母音の考え方

も多様であること、これらのことを考えれば、彼らにとって半母音はまさにとらえがたい音であった。その中でも、彼らが半母音の分析の中で、母音はそれ自体で「音」つまり「声」を生み出し、その「音」を子音と結びつけるという古典期からの音の概念を持ち出さなかったのは、予想外のことであった。音節の中で中心的位置を占めるのか、あるいは周辺の位置を占めるのか、この観点から考察しても、母音と子音の区別はできたはずである。しかし、彼らにとって母音か子音かの基準は、主に、調音器官による息の遮断の有無であった。おそらく伝統的な枠組みから脱し、科学的なアプローチを目指そうとした彼らの意欲が、彼らからこの伝統的な概念を遠ざけたに違いない。このような困難に遭いながらも、彼らは半母音を言語音の体系の中に組み入れ、その調音の記述も試みて、前世紀までの半母音の記述とは比べようもないほど彼らの半母音の分析は精緻になっていった。そこにはこのとらえ難い [j] と [w] を科学的な方法論によって分析しようとする彼らの試みとともに、彼らが直面した試練が確固として感じ取られるのである。

## 注

1. straw, lawにみられる母音は、当時は二重母音であった。
2. 子音が「母音なしで名前をつけることはできない」ということは、例えば子音1の名前 [el] が子音 [l] だけでなく母音 [e] とともに構成されていることを意味する。これは音声学的な観点からみれば不適切な定義であるが、当時子音の定義によく用いられている。Hartはさらに詳細に調音器官の動きを記述して母音と子音の定義を試みている (30a, 36a)。

3. 本稿で使用するWallisのテキストは6版(1765)である。この版はWallis自身が担当した最後の版、5版と本質的に同じである（Kemp, "Phonetics" 73）。
4. 呼気の方角による分類の分析に関してはKemp, Introduction 5 2 - 5 4 参照。
5. Wallisはmutaeの範疇にてふたつの異なる音価に対し同一の記号Fを使用している。

## 参考文献

- Brown, Keith et al., ed. *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. 2nd ed. 14 vols. Oxford: Elsevier, 2006.
- Bullokar, William. *Booke at Large* (1580) and *Bref Grammar for English* (1586): Facsimile Reproductions with an Introduction by Diane Bornstein. New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1977.
- Cooper, Christopher. *The English Teacher*. 1687. English Linguistics 1500-1800. 175. Menston: Scolar Press, 1969.
- Dobson, E. J. *English Pronunciation 1500-1700*. 2nd ed. 2 vols. 1968. Oxford: Clarendon Press, 1985.
- Gill, Alexander. *Logonomia Anglica*. 1619. *Alexander Gill's Logonomia Anglica* (1619). Ed. Bror Danielsson and Arvid Gabrielson. Part 1 and 2. Stockholm Studies in English. 26-27. Uppsala: Almqvist and Wiskell, 1972.
- Gimson, A. C. *An Introduction to the Pronunciation of English*. 5th ed. Revised by Alan Cruttenden. London: Edward Arnold, 1994.
- Hart, John. *An Orthographie*. 1569. *John Hart's Works on English Orthography and Pronunciation [1551-1569-1570]*. Ed. Bror Danielsson. Part 1. Stockholm Studies in English. 5. Uppsala: Almqvist and Wiskell, 1955. 165-228.
- Holder, William. *Elements of Speech*. 1669. English Linguistics 1500-1800. 49. Menston: Scolar Press, 1967.
- Kemp, J. A. Introduction. *John Wallis's Grammar of the English Language with an Introductory Grammatico-Physical Treatise on Speech (or on the Formation of All Speech Sounds): A New Edition with Translation and Commentary*. The Classics of Linguistics. London: Longman, 1972. 1-73.
- . "Phonetics: Precursors of Modern Approaches." Keith Brown et al. Vol. 9. 470-89.
- Lehnert, Martin. "Die Anfänge der wissenschaftlichen und praktischen Phonetik in England." *Archiv für das Studium der neueren Sprachen*. 173 (1938): 163-80; 174 (1938): 28-35.
- . *Die Grammatik des englischen Sprachmeisters John Wallis (1616-1703)*. Sprache und Kultur der germanischen und romanischen Völker. A. Anglistische Reihe. Bd. 21. Breslau: Verlag Priebatsch's Buchhandlung, 1936.
- Mulcaster, Richard. *The Elementarie*. 1582. *Mulcaster's Elementarie*. E. T. Campagnac. London: OUP, 1925.
- Priscianus. *Institutiones grammaticae*. Ed. H. Keil. *Grammatici Latini*. 2. Hildesheim: Georg Olms, 2002.
- Robins, R. H. *A Short History of Linguistics*. 4th ed. New York: Longman, 1997.
- Smith, Thomas. *De recta et emendate linguae anglicae scriptione, dilogus*. 1568. *Sir Thomas Smith: Literary and Linguistic Works [1542-1549-1568]*. Ed. Bror Danielsson. Part 3. Stockholm Studies in English. 61. Uppsala: Almqvist and Wiskell, 1968.
- Wallis, John. *Grammatica Linguae Anglicanae*. 6th ed. London: G. Bowyer, 1765.
- Wilkins, John. *An Essay towards a Real Character, and a Philosophical Language*. 1668. English Linguistics 1500-1800. 119. Menston: Scolar Press, 1968.